

『サラディンの稀有で至高の書』——その4——

バハー・アッディーン・イブン・シャッタード

松田俊道 訳

アサド・アッディーンの死とスルターンへの権威の移譲の記述

アサド・アッディーン⁽¹⁾は大食漢で脂肪分の多い肉の摂取に強くこだわっていた。消化不良と扁桃腺瘍がしばしば彼を襲った。彼は著しい苦闘の末恢復した。然るに、激しい病が彼を捕らえ、前述の年（五六四年）ジュマーダー・アルアーヒラ月二二日（一一六九年三月二二日）に没した。アサド・アッディーンの死後、彼の権威はスルターンに移譲された。彼の権力基盤は強固になり、諸事が最良の方向に進んでいった。彼は金銭を与え、人を掌握した。この世のことが彼のもとで容易くなり、この世を支配した。彼は神のお恵みに感謝した。彼は酒を断ち、気晴らしのものを断ち、勤勉と敬虔な努力の衣服を纏った。彼はそこから退かなかった。神が彼をそのお慈悲のもとに召されるまで、

真剣さのみが増大していった。

私イブン・シャッタードは、彼が言うのを聞いていた。

「神が私にエジプトの支配を可能にしたとき、私は神が海岸地域の征服を望んでいたことを知った。というのは、神はそのことを私の心に投げ込んだからである」

彼の權威が確立したときから、カラク⁽²⁾、シャウバク⁽³⁾やそれ以外の地域のフランクに對する攻撃は中断していなかったが、彼はこのとき以外に記録されたことが無いような夥しい贈り物や恩恵で人々を圧倒した。

このすべては彼がまだ政權に従っている宰相のときであつた。一方で彼はスナ派を強化し⁽⁴⁾、この国の人々に學問、法学、スーフイズム、信仰を植え付けていた。人々はあらゆる方面から彼のもとに急ぎ、またあらゆる場所から彼のもとにやつてきた。彼は来る者を失望させなかつた。彼は五六五年（一一六九—七〇年）まで嘆願者を拒まなかつた。

ヌール・アッディーンはスルターンがエジプトで權力を確立したことを知ると、アサド・アッディーンの總督からヒムス⁽⁵⁾を奪つた。それは五六四年ラジャヤブ月（一一六九年四月）のことであつた。

フランクのダミエッタ攻撃の記述

神がダミエッタを守護されますように

フランクはムスリムとその軍隊の間で起こつていたこと、およびスルターンがエジプトに於いてその權力を樹立したことを知ると、彼が權力と支配を獲得したので、彼が彼らの土地を支配し、彼らの領地を破壊し、彼らの痕跡を排除したことを理解した。フランク軍とビザンツ軍は集結し、エジプトの攻撃とその占領、支配について語っていた。そして彼らはダミエッタ攻撃を決めた。というのもそこは海からも陸からも攻撃できるからであつた。また、もしそこが彼らのものになつたならば、彼らは足場を獲得し避難場所を得ることになるからであつた。それゆえ彼らは、投

石機、ダッバー *al-Dabbāba* ⁽⁶⁾、大弓、包囲のための機具など導入した。

シリアにいたフランクはそのことを聞くと、警戒を強め、アッカの城砦をムスリムから奪取し、その領主を捕虜にした。彼は旗持ち *al-'alam dar* ⁽⁷⁾ フトルフ *Khutlukh* と呼ばれるヌール・アッディーンのマムルークであった。それは同年のラビー・アッサーニ月（一一六九年二月—一一七〇年一月）のことであった。同年ラジャヤブ月（一一七〇年三—四月）、ヌール・アッディーンの友人で彼の侍従のアミールであったイマーディー *al-'Imādī* が死去した。彼はバールベクとタドムルの領主であった。

ヌール・アッディーンは、フランクの活動を見て、彼らがダミエッタに宿営したことを知らされると、彼は彼らの心を悩ますことをもくろんだ。彼は同年シャバーン月（一一七〇年四—五月）にカラクを包囲した。海岸にいたフランクは彼の方に向かっていった。彼はカラクを離れ、彼らと遭遇するために進んだ。しかし、彼らは彼に対して立ち上がらなかった。

すると、彼のもとにアレッポのマジウド・アッディーン *Majd al-Dīn Iḥn al-Dāya* の死の知らせが届いた。彼の死は五六五年のラマダーン月（一一七〇年五—六月）のことであった。彼は心を取り乱した。というのは、マジウド・アッディーンは彼の支持者であったからである。そこで彼はダマスクスに向かって帰還した。そのとき、アレッポに於いて、その地の多くを破壊した地震の知らせが彼のもとに届けられた。それは、同年シャッワール月一二日（六月二九日）のことであった。彼はそのときアシュタラー *Asharā* ⁽⁸⁾ にいた。そのとき彼はアレッポに向かって進んだ。するとモスルにいた彼の兄弟のクトゥブ・アッディーンの死の知らせが届いた。彼の死は、同年のズー・アルヒッジャ月二二日（一一七〇年九月六日）のことであった。その知らせは彼がテル・バーシル *Tell Bāshir* にいるときであった。彼はその夜モスルに向かって進んだ。

スルターンは敵のダミエッタ攻撃の激しさを知ると、その町に兵員と勇敢な騎士を派遣し、物資や武器を投入した。彼をその防衛で安心させますように。彼はそこに駐留している部隊に、もし彼らに攻撃がなされたときには、援軍と武器および彼らのために敵を悩ますこと約束した。そして施し物や贈り物を惜しみなく与えた。彼は統制の効いた宰

相であり、彼の命令に反論する者はいなかったのである。

すでに述べたようにフランクはその町を攻撃した。彼らのその町への進撃と戦闘が強まった。同時に彼は外から彼らへの攻撃を仕掛け、また内部で軍隊が彼らと戦闘を繰り返した。

敵を害し、ムスリムに神の勝利を。彼らを助け、援助する神の宗教に勝利を与える神の目的は卓越していた。敵の損害は今や明らかになり、正しい信仰は異教徒を圧倒した。ムスリムは彼らの首を助け、彼らを容赦するの見た。フランクは失望し、敗北して退却していった。

彼らの投石器は燃やされ、彼らの装備は鹵獲された。彼らの多くが殺害された。ダミエッタは神のご加護とお恵みでフランクの目的から救い出された。彼らの惨敗が神の助力によって明らかとなった。スルターンの立場が確固たるものとなった。

サラディンが父を探し求める記述

スルターンは彼の幸せを完結させ、喜びを成就するため彼の父を探し求めて人を派遣した。それは預言者ユーセフ——神のお恵みと平安が彼とすべての預言者たちにあれ——に起こったことと類似の話と結びつけてのことであった。彼の父ナジウム・アッディーン⁽⁹⁾が五六五年ジュマダー・アルアーヒラ月（一二七〇年二―三月）に彼のもとに現れた。彼は彼が習慣としていた方法で振舞った。そして彼は彼が獲得したあらゆる権力を父に与えようとしたが、彼はそれを拒否して言った。

「息子よ。神はお前がこのことに対して平等でなければこのことのためにお前を選ばなかった。幸せな状態が変えられる必要はない」

けれども、サラディンは領内のあらゆる金庫の管理を父に与えたのである。彼は——彼に神のお恵みあれ——寛大で、放出し、取り戻すことはなかった。スルターンはアーディド al-Āḍid Abū Muhammad 'Abd Allāh⁽¹⁰⁾が死去するまで宰

相として権力を行使し続けた。彼と共にエジプト人の王朝が終焉を迎えた。

一方ヌール・アッディーン―彼に神のお恵みあれ―に關していえば、五六六年ムハッラム月（一一七〇年九月―一〇月）にラッカを奪取して、そこからナシービーン *Nasibin* に進んだ。彼はその月の残りにそこを占領した。彼は同年ラビー・アッサーニー月（一一七〇年十二月―七一年一月）にシンジャール *Sinjāra* を手に入れた。

その後、彼はモスルに向かったが、そこを攻略する目的ではなかった。彼は彼の軍隊と共にバクル *Bakr* の浅瀬を渡って進み、皆と呼ばれる丘の上にモスルと対面して宿營した。彼は、甥のサイフ・アッディーン・ガーズイー *Sayf al-Dīn Ghāzī*（モスルの領主）に使者を送り、彼の目的が敵意ではないことを知らせた。それからヌール・アッディーンは彼と和約を結んだ。そして彼はジュマード・アルウラー月一三日（一一七一年一月二日）にモスルに入った。彼はサイフ・アッディーンがこの町の支配者であることを承認し、彼と自分の娘を結婚させた。また、サイフ・アッディーン兄弟のイマード・アッディーンにシンジャールを与えた。その後、彼はモスルを離れ、シリアに帰還し、同年シャバーン月（四月―五月）にアレppoに入った。

アーデイドの死

（ファアティマ朝のカリフ）アーデイドの死は五七七年ムハッラム月一〇日月曜日（一一七一年九月一三日）のことであった。権力がスルターンに移譲された。彼はアーデイドの治世の終わりが近づく、まだ彼が生きてはいたが、アッバース朝のカリフの名でフトバを行った。フトバはその冒頭に於いてカリフ・ムスタディー *al-Mustadī bi-Amr Allah* の名で行われた。またその形式は厳密に継続された。彼は金庫を手に入れたときはいつでも、その中身を与えた。同様に国庫が彼のために開かれたときは、その中を明け渡し、自らのためには何も残さなかった。スルターンは敵の土地の攻撃やこのための装備、支援の手配を考えて遠征の準備を計画した。

ヌール・アッディーンもまた遠征の決定をし、甥のモスル支配者を招集した。間もなくして彼はヌール・アッ

ディーンに仕えるために軍隊を率いて到着した。この遠征はアルカー・Arga(1)の征服のためであった。ヌール・アッディーンは、甥と共に五六七年ムハッラム月(一一七一年九月一〇月)にそこを奪取した。

エジプトから開始された最初の遠征の記述

サラディンは、正義を与え、慈善を広めること、人々に対する気前の良さを五六八年(一一七二—七三年)まで続けた。そのとき彼は、カラクの領土を目指して軍隊を率いて進んだ。第一にそこはエジプトに最も近く、またエジプトを目指す者を阻止する道に位置していたからである。いかなる隊商も、サラディン自身が敵地を通って護送しなければこの地域を通過できなかった。それゆえ、彼は両地域が相互に結ばれ、旅行者が容易く往来できるように交通路の拡大と改善を望んだ。彼は五六八年にそこを目指して進み、そこを包囲した。すると、彼とフランクの間で幾度となく戦闘が起こった。彼はこの遠征においては何も得るものが無くエジプトに帰還した。けれども、彼はこの企ての報酬を得た。

一方、ヌール・アッディーンは、同年ズー・アルカーダ月(一一七三年六月)にマルアシュ Marsh を征服した。次いで同年ズー・アルヒッジャ月(七八月)にバハスナー Bahasna を奪取した。

彼の父ナジウム・アッディーンの死去の記述

スルターンが彼の遠征から帰還しているとき、エジプトに到着する前に、彼の父ナジウム・アッディーンの死去の知らせが彼のもとに届いた。彼は父の死に際に立ち会えなかったもので、このことは彼には深い悲しみであった。彼の死の原因は落馬であった。彼に神のお恵みあれ。彼は馬の激しい疾走とポロを熱愛していた。それゆえ、人は彼がポ

口をしているのを見たときには、「彼は必ず馬から落ちて命を落とすことになるであろう」と言っていた。彼のカイロに於ける死は、神のお恵みで、五六八年（一一七二―七三年）のことであった。

イエメン征服の記述

五六九年（一一七三―七四年）のことであった。スルターンは、彼の軍隊の力、彼の兄弟たちの数の多さ、彼らの勇敢さを見た。そのとき彼は耳にした。イエメンである男がそこを支配し、いくつかの城砦を奪取して、彼の名でフトバを行っていた、と。彼はアブド・アンナビー・ブン・マフディー・ʿAbd al-Nabi b. Mahdi⁽¹²⁾と呼ばれていた。そして彼の支配があらゆる大地に広がり、ことが彼のために引き起こされるであろうと宣言していた。

そこでスルターンは、長兄トゥーラーンシャー Shams al-Dawla al-Malik al-Muʾazzam Turanshah をイエメンに派遣することを決定した。彼は、気高く、高貴で優れた気質の持主であった。私（イブン・シャッダード）はサラディンから聞いたことがある。神のお恵みが彼にあれ。サラディンは彼の高貴さ、彼の性格の良さを讃え、自分よりもより重きを置いていたと。

トゥーラーンシャーは、五六九年ラジャブ月（一一七四年二月三月）にイエメンに向かって出発した。彼はイエメンに到着すると、神は彼の手により征服を行せしめた。そこに権力を樹立していた異端者は殺された。トゥーラーンシャーはその地の大部分を占領し、それを分け与え、数多くの人々を豊かにした。

ヌール・アッディーン・ムハンマド・ブン・ザンキーの死去の記述 彼に神のお恵みあれ

ヌール・アッディーン⁽¹³⁾の死去の原因もまた、彼を苦しめていた化膿性扁桃腺炎であった。医者はその治療をするこ

とが不可能であつた。彼は五六九年シャツワール月一日水曜日（一一七四年五月一四日）にダマスクスの城砦に於いて死去した。彼の地位は息子のマリク・アッサーリフ・イスマイーール al-Malik al-Salih Ismā'īl によつて継承された。

スルターンは私に次のように語っていた。

「われわれはヌール・アッディーンが、おそらくエジプトに於いてわれわれを攻撃しようとしていたと聞いていた。われわれの何人もの指揮官が指摘していたことは、サラディンは対立を明らかにし、反抗し、異議を唱えるべきで、もしサラディンへの攻撃が現実のものとなるならば、ヌール・アッディーンを撃退すべく彼の軍隊と前線で相見えるべきであるということであつた。私一人だけが、そのようなことが言われるのは許されないと行って、彼らと意見が異なっていた。われわれの間の意見の違いはヌール・アッディーンの死去の知らせが届くまで続いていた」

アスワンに於ける五七〇年（一二七四—七五年）のカンズ背信の記述

カンズはエジプト人の軍人指揮官の一人であつた。彼はアスワンに逃れ、そこを拠点とした。彼はことを起こそうと計画し続けていた。彼は彼のもとに黒人兵を集めていて、彼らに彼がこの国を支配し、エジプトの王朝を回復させるであらうと信じさせていた。人々は心のなかにエジプト人がもつ独特の雰囲気をもっていたので、この企てを些細なこととみなしていた。彼のもとに多くの人々と黒人兵が集結し、彼はクースとその周辺の地域に向かった。

この知らせがスルターンに届いたので、彼はカンズ・アッダウラ⁽¹³⁾に対して、エジプト支配の甘さを味わたことのある者たちで、またそのことを彼らから奪い去られることを恐れる者たちの中から選ばれた重裝備の大軍を派遣した。さらに、スルターンは彼らの指揮を彼の兄弟のサイフ・アッディーン al-Malik al-Fatih Sayf al-Dīn に委ねた。彼は彼らを率いて敵に至るまで進み、前線で彼らに遭遇し、彼らを打ち負かした。彼は大多数の敵を殺戮し、彼らを根絶やしにし、彼らの反乱を鎮圧した。それは、五七〇年サファール月七日（一二七四年九月七日）のことであつた。

このことによつて彼の体制の基盤が強固なものとなり、繁栄した。慈悲深く恵深き神よ。

フランクのアレクサンドリア港の攻撃の記述 神の御守護あれ

フランク―神が彼らを見放しますように―はエジプトでの変動と政權の変化を知ると、彼らはエジプト征服の野心を抱いた。彼らは海上から軍隊を派遣した。艦隊は六〇〇艘の船団で、大きな軍船 *shaynī*、輸送船 *farāda*、巨船 *bulsa* などで構成されていた。兵員は記録によれば三万人であった。彼らは、五七〇年サファル月七日（一一七四年九月七日）にこの港に集結した。スルターンは、港を強大な軍隊で増強し、主導權を掌握した。神が敵の心のなかに入り込み、恐怖と動揺から彼らに平靜を許さなかった。彼らは三日間港を包囲し、港に侵入した後、失望し、絶望して退却した。彼らは港を激しく攻撃した。しかし神は港を彼らから守護した。

彼らはスルターンの動きが彼らの方を向いていることに気付いたとき、彼らの投石機と彼らの裝備を放棄するのに時間はかからなかった。すると、街の人々はそれらを奪い、焼き尽くした。これは神のムスリムへの最も偉大な恩恵の一つであり、あらゆる幸せと成功の印であった。

一方、ヌール・アッディーン―彼に神のお恵みあれ―について言えば、息子のマリク・アッサーリフ・イスマール *al-Malik al-Salih Isma'il* をダマスクスに残していた。アレppoの城砦については、シャムス・アッディーン *Ibn al-Dāya Shams al-Dīn 'Alī* とシャーズバフト *Shādhbakti* が支配していた。アリーはことを起こそうとしていた。そこで、サーリフはダマスクスからアレppoに進んだ。彼はサービク・アッディーン *Sabīq al-Dīn* を伴いムハッラム月二日（一一七四年八月三日）にアレppoの外に到着した。そのときバドル・アッディーン・ハサン *Badr al-Dīn Hasan* がサーリフに会うために城外に出てきた。するとサービク・アッディーンは彼を逮捕してしまった。マリク・アッサーリフは城砦に入ると、彼はシャムス・アッディーンと彼の兄弟ハサンを逮捕した。そして三人を投獄した。同日、イブン・

ハッシャープ *Abū al-Fadl b. al-Khashshab* がアレppoで起こった争いのために殺された。彼は、イブン・アッダーヤ兄弟の逮捕の一日前に殺害されたと言われていた。というのも彼らがこの殺害に関与していたからである。

スルターン—神のお恵みが彼にあれ—のシリアへの出向と彼のダマスクス支配の記述

スルターンはヌール・アッディーンの死去が間違いないことを確認したとき、彼の息子はまだ子供で、王権を背負うには重荷であった。神の敵から領土を防衛することは無理であった。そこでスルターンはシリアへの出向の準備を整えた。シリアはイスラームの領土の礎であったからである。彼は大軍を編成し、エジプトの保護と防衛、秩序と統治を引き受けられる者を残した。彼は、シリアの人々とアミールたちに書簡を送って、彼の家族と親類の多くと共に出発した。

マリク・アッサーリフに従う者たちは意見を異にし、彼らの統制は混乱していた。彼らはお互いを恐れていて、彼らのなかの何人かを逮捕した。このことは、残りの人々がそのようなことが行われたことへの恐怖が理由であり、また若者たちへの人々の心変わりが理由であった。事態は、シャムス・アッディーン *Shams al-Dīn b. al-Muqaddam* がスルターンに書簡を書き送る必要に迫られた。スルターンは、自分がマリク・アッサーリフの権威を受け継ぎ、政権を行使すること、曲げられてしまったものを正すことを彼に求めてシリアに到着した。スルターンに対する権威の否認はなく、平和的な引き渡しにより、五七〇年ラビー・アッサーニー月の最後の日の火曜日（一一七四年一月二四日）にダマスクスに入り、城砦を引き継いだ。

彼は最初に父の館に入った。人々が彼のもとに集まり、彼を喜ばせた。同日、彼は巨額の金銭を人々に分け与え、ダマスクスの人々に歓喜と幸福を示した。また、彼らも彼に喜びを示した。彼は城砦に登城し、彼の到来はその支配を確立した。その後間も無く、彼はアレppoに向かって進んだ。途中でヒムスは敵対したが、彼はこの年のジュマード・アルウラー月（一一七四年二月）に容易くこの町を奪取した。彼はアレppoに到着すると、同月最後の日

金曜日（一二月二七日）に戦いを挑んだ。これが最初の出来事である。

サイフ・アッディーンが彼の兄弟イッズ・アッディーンを彼（スルターン）に
対して派遣したことの記述

サイフ・アッディーン―モスルの領主―が起こつていたことに気付いたとき、彼はこの男サラディンのことがすでに恐ろしくなつていたこと、彼の権力が偉大になつていたこと、彼の影響が増大していたことを認識した。そのため彼は、もし彼がサラディンを否定すれば、この地域は奪われ、支配が確立され、彼の支配が印象付けられることを恐れた。それゆえ、彼は十分な量の軍隊、強力な軍隊を準備し、彼の兄弟イッズ・アッディーン 'Izz al-Dīn Mas'ūd をその指揮官に据えた。彼らはスルターンとの遭遇を望み、彼との戦いを期待し、彼をこの国から追い出すことを目指して進んだ。

そのことがスルターンの耳に達すると、彼は、前述の年のラジャブ月の初日（一一七五年一月二六日）にアレppoから引き揚げ、ハマーに退却した。さらに、彼はヒムスに向かい、その城砦の奪取を試み、それを手に入れた。その後、イッズ・アッディーンはアレppoに到着し、そこにいた軍隊が彼に合流した。彼らは大勢を率いてそこから進んでいった。

彼らの進軍を知ると、スルターンは、ハマーの角 *Quṭn Hanāt* ⁽¹⁴⁾ で彼らを襲撃しようとして進み出た。彼は彼らに使者を送り、彼らは彼に使者を送った。彼は和約が結べるように努力したが、彼らは彼と和約を結ばなかった。彼らは、おそらく彼らの大きな目的と十分な望みを、彼との戦いで成し遂げられるであろうと思った。しかし、結末は彼らが思いもよらぬ方向に引きずり込まれた。

両軍の間で戦闘が開始され、神は彼の前で彼らが打ち負かされることをお決めなされた。彼らの多くが捕縛された。けれども、スルターンは彼らの多くに慈悲を与え、彼らを解放した。それは、ハマーの角で五七〇年ラマダーン

月一九日（一一七五年四月十三日）に起こったことである。

彼らの敗北の後、スルターンは進軍してアレppoに宿営した。それは二度目の攻撃であつた。彼らは、スルターンがマッラ al-Ma'arra とカファルターブ Kafarjib およびバーリーン Ba'rin を得るといふ条件で彼と和約を結んだ。それは同年の終わりでのことであつた。

サイフ・アッディーン自らの出撃の記述

この戦いが起こったとき、サイフ・アッディーンは彼の兄弟イマード・アッディーンからシンジャールを奪い、彼への忠誠を強いることが目的でそこを包囲していた。彼の兄弟はすでにスルターンへの協力関係を明らかにし、それを維持していた。サイフ・アッディーンは、町の包囲を強めた。投石器を用いて、城壁に多数の突破口が開くまで投石した。彼は今にもそれを手に入れる間際であつた。そのとき、この戦いが起こったことが彼の耳に届いた。すると彼は、このことが彼の兄弟に伝わるであろうことを恐れ、勇気を奮い起こし、心を強くして、彼に和約の使者を送り、和約を結んだ。

その後直ちに、彼はニシービーン Nisibin に向かい、軍隊を集め、彼らへの支払いに尽力した。次いで、彼はユーフラテス川に進み、ビーラ Bira で渡河し、川のシリア側で宿営した。彼はクムシュテキーン Kunnushikin⁽¹⁵⁾ とマリク・アッサーリフに使者を送り、彼がそこで彼らに合流できる基礎が確立するようにした。クムシュテキーンは彼のもとに現れ、何度も協議が行われた。彼は、マリク・アッサーリフと彼との会見が確かなものになるまで、何度も立ち戻ることを決心していた。彼らは、マリク・アッサーリフに会見することが許された。彼はアレppoに到着し、マリク・アッサーリフは彼に会うために自ら現れた。サイフ・アッディーンは、城砦の近くで彼に会見した。サイフ・アッディーンは彼を抱きしめ、涙を流した。それからサイフ・アッディーンは、彼に城砦に戻るよう命じた。彼は城砦に戻った。一方、サイフ・アッディーンは、⁽¹⁶⁾ 'Ain al-Mubarakka に宿営し、

しばらくの間そこに留まった。アレッポの軍隊は毎日彼に奉仕するために彼のもとを訪れた。

サイフ・アッディーンは、随行者の者に付き添われて城砦に登り、そこでパンを食べて下城した。彼はディヤールバクルの軍隊と多くの人々を伴ってテル・アッスルターン *Tell al-Sulṭān* に進んだ。一方、スルターンはすでにエジプトからの軍隊の招集を執行していて、その到着を待っていた。彼らは彼らの事情や方策において遅れていたが、彼らは遅れに何か意図があるとは感じていなかった。結局、エジプトの軍隊は到着した。スルターン―神のお恵みが彼にあれば―はハマーの角まで進軍した。敵方は、スルターンの軍隊が近づいていたことを知ると、彼らは前哨を派遣し、情報収集する者を手配した。彼らは、スルターンが小さな護衛隊に伴われてすでにトルコマンの泉に到着していたこと、また彼の軍隊は馬などに水を与えるために分散していたことを知った。もし神が勝利を望んでいたならば、彼らはその時間にスルターンを攻撃できたのである。しかし、「それはアッラーが、初めから起こると決まっていたことに最後の決着をおつけになるためであつた」¹⁷。彼らは、スルターンが彼の馬と彼の軍隊に水を与えるまで攻撃を躊躇した。それから、彼らは戦闘の準備をした。

軍勢は前線で朝を迎えた。それは五七一年シャッワール月一〇日木曜日（一二七六年四月二二日）の朝であつた。両軍は遭遇し、衝突し、壮絶な戦いがそれに続いた。スルターンの左翼がザイン・アッディーン *Zayn al-Dīn* の息子ムザッファル・アッディーン *Muṣaffar al-Dīn* ¹⁸ によつて破られた。彼はサイフ・アッディーンの軍の右翼にいたからである。スルターンは自ら戦いを挑んで、数多くの高位のアミールたちを捕虜にした。彼らのなかにはファフル・アッディーン・アブド・アルマシーフ *Fakhr al-Dīn ʿAbd al-Maṣīḥ* が含まれていた。彼は彼らに慈悲を与え、彼らを解放した。

サイフ・アッディーンは、アレッポに退却した。彼はそこから彼の資金を回収し、ユーフラテス川を渡り、彼の領地に戻った。

スルターン―彼に神のお恵みあれば―は敵軍の追跡を止め、その日の残りを敵軍の天幕のなかに留まった。彼らは彼らの装備をそのまま残していた。調理がされていた調理器具もあつた。スルターンは、厩舎（のなかの馬）を分配し

た。彼らの貯蔵庫を分け与え、サイフ・アッディーン¹の天幕をイッズ・アッディーン² 'Izz al-Din Farukshah に与えた。その後、彼はマンビジュ³ Manbij に進み、その月の残りにそこを獲得した。

その後、スルターンは、アウザーズ⁴ A'zzaz の城砦に向かい、そこを包囲した。それは五七一年ズー・アルカーダ月四日（一一七六年五月一日）のことであつた。彼がそこに滞在しているとき、イスマール派の人々が彼への襲撃を試みた。彼に神のお恵みあれ、神は彼らの企てから彼を救い出したのである。彼は彼らを制圧した。そしてこのことは彼の決心を弱めることはなかつた。彼は、そこを獲得するまで包囲を続け、同年ズー・アルヒッジャ月一日（一一七六年六月二四日）に獲得した。その後、一六日（六月二六日）にアレッポに入り、しばらくの間留まり、そこから出発していった。彼らはヌール・アッディーン⁵の若い娘をスルターンのもとに送り届けた。彼女は、彼にアウザーズを求めると、彼はそれを彼女に与えた。

その月の残りに、彼の兄弟シャムス・アッダウラがイエメンからダマスクスに到着し、そこにしばらくの間留まつた。その後、シャムス・アッダウラはエジプトに戻り、アレクサンドリアに於いて五七六年サファル月一日木曜日（一一八〇年六月二六日）に死去した。

スルターンは、国土の状態を調査し、その基礎を確立するためエジプトに戻つた。彼がエジプトに旅立つたのは、五七二年ラビー・アルアッワル月（一一七六年九月一〇月）であつた。彼は、彼の兄弟シャムス・アッダウラをダマスクスにおける彼の総督として残した。スルターン―彼に神のお恵みあれ―は、エジプトに留まり、その基礎を確立し、その欠点を完全なものにした。

スルターンは軍隊を休息させ、遠征の準備をした。それから彼は、海岸地帯に向かつて出発し、ラムラでフランクに遭遇した。それは五七三年ジュマダー・アルウーラー月⁶の始め（一一七七年一〇月末）であつた。

ラムラでの敗北の記述

フランクの指揮官アルナート公 (Renaud de Chailion) は、賠償によつてアレッポで解放されていた。彼は、ヌール・アッディーンの治世に捕虜となつていた。この日、敗北がムスリムたちに起こつていた。スルターンは、その日の敗北の様子をかつて語つていた。それによると、ムスリムたちは戦いに動員されていた。敵が接近してきたとき、味方の何人かは、右翼が左翼側に渡り、また左翼が中心部に渡ることを決めた。というのも、戦鬪の間、彼らは「ラムラ大地」として知られる丘を背後にすることができずからである。ムスリムたちがこの動きをする間、フランクは彼らを襲撃し、神は彼らの敗北を決めた。彼らは大敗北をした。しかも、彼らには避難をする要塞が近くに無かつたのである。彼らはエジプトに向かつて潰走し、道の途中で散り散りになつた。敵は彼らの多くを捕虜にした。彼らのなかには、法学者のイーサーが含まれていた。これは大敗北であつた。しかし、神は有名なヒッティーンの戦いでわれわれの損失を回復させた。神を讃えよ。

一方マリク・アッサーリフについては、彼の支配は失われていた。彼は彼の領地の統治を担つていたクムシュテキーンを逮捕した。そしてマリク・アッサーリフは、彼にハーリム *Harim* の引き渡しを求めた。しかし、クムシュテキーンはそれを拒み、殺害された。

フランクが彼の殺害のことを耳にすると、彼らはハーリムを求めて襲撃した。それは五七三年ジュマーダー・アルアーヒラ月（一一七七年一一二月）のことであり、マリク・アッサーリフの軍隊は、フランクの軍隊と対峙した。城砦の部隊がフランクの側から危険を察知したとき、彼らは同年ラマダーン月の最後の一日間（一一七七年三月中旬）に城砦をマリク・アッサーリフに引き渡した。

フランクはこのことを知ると、彼らはハーリムから彼らの領土に向かつて出発していった。これは同年ラマダーン月一九日（一一七七年三月一日）のことであつた。そしてマリク・アッサーリフはアレッポに戻つた。

彼の側近は意見を違えたままであった。テル・ハーリドに於けるキリージュ Qiliḡ Gharas al-Dīn の反乱のことを知るまでは、彼らのうちの何人かはスルターンの側に傾いていた。五七六年ムハッラム月一〇日（一一八〇年六月五日）に、彼はキリージュに対して軍隊を派遣した。

次いで、彼のもとに彼の従弟でモスルの領主であるサイフ・アッディーン・ガーズイーの死去の知らせが届いた。彼の死去の日は同年サファル月三日（一一八〇年一月二八日）のことであった。彼の地位は、彼の弟イッズ・アッディーン・マスウードによって継承された。シャムス・アッダウラの死去の日付については前述した。彼に神の讃えあれ。

スルターン―彼に神の讃えあれ―のシリアへの帰還の記述

スルターンは敗北の後にエジプトに戻ると、軍隊が良好な状態を回復するまでそこに留まった。彼はシリアの悲惨な状況を知ると、シリアに戻る決心をした。彼の帰還は異教徒に対する攻撃のためであった。そのとき、キリージュ・アルスラーン⁽¹⁹⁾の使者がスルターンに協約を求め、アルメニア人に対抗するための援助を彼に求めて到着した。そこで彼は、キリージュ・アルスラーンの勝利のために、レオン^{Leon}の息子⁽²⁰⁾の領土に向かう判断をした。彼は、カラ・ヒサル Qara Hisar に宿営した。彼は、アレppoの軍隊を指揮下においた。というのは、彼はすでに協約のなかでそのことを条件づけていたからである。彼らは、バハスナー Bahasna とマンスール砦の間のナフル・アルアズラク al-Nahr al-Azraq（青い川）に集結した。彼はそこを渡り、ナフル・アルアズワド al-Nahr al-Azwad⁽²⁰⁾（黒い川）に進んだ。彼は、レオンの息子の領地を攻撃し、彼らから砦を奪い、それを破壊した。彼らは彼に捕虜を差し出し、彼に和約を求めた。それゆえ、スルターンはそこから退却した。

キリージュ・アルスラーンは自身を含めたすべての東方の領主たちが、スルターンと和約を結ぶために彼のもとに使者を送った。すると和約が成立し、スルターンは五七六年ジュマード・アルウラー月一〇日（一一八〇年一〇

月一日)に宣誓を行った。キリージュ・アルスラーンおよびモスルとディヤールバクルの領主がこの和約に加わった。それはユーフラテス川の支流のサンジャ川 *Zahr Shanjia* で締結された。スルターンはそこからダマスクスに戻った。

マリク・アッサーリフの死去の記述

五七七年ジュマダー・アルアーヒラ月(一一八一年一〇月中旬)に入ったとき、マリク・アッサーリフは痼痛に苦しんだ。彼はラジャブ月九日(同年十一月一八日)に最初に倒れた。そして同月三日(一二月二日)には、病状の激化のために城砦の門が閉じられた。彼はアミールたちを一人ずつ呼び、モスルの領主イZZ・アッディーンに対して忠誠の誓いをさせた。

二五日(一二月四日)に彼は―彼に神のお恵みあれ―死去した。彼の死は人々の心に深い印象を残した。

イZZ・アッディーンのアレッポへの到着の記述

マリク・アッサーリフが死去すると、「側近たちは」急いでイZZ・アッディーン・マスウード・ブン・クトブ・アッディーンにそのことを知らせた。その知らせとは、マリク・アッサーリフが彼を後継者に任命し、彼の側近にイZZ・アッディーン・マスウードに対して忠誠の誓いをさせたということである。そこで、イZZ・アッディーンは、スルターンを恐れて「スルターンに彼よりも先にアレッポを占領されてしまうこと」大急ぎでアレッポに向かった。彼のアミールたちのなかで最初にアレッポに到着した者は、ムザッファル・アッディーン *Muzfar al-Din b. Zayn al-Din* とサッルージュ *Sarrūj* の領主であった。彼ら二人と共に、「アレッポの」アミールたちにイZZ・アッディーンに対して忠誠の誓いをさせる者も到着した。彼らの到着は、同年のシャーバーン月三日(一一八一年一二月二日)であった。

シャールバン月二〇日（一二月二九日）にイッズ・アッディーンはアレッポに到着した。彼は城砦に登城し、倉庫や金庫を支配下に置き、マリク・アッサーリフの母と同年シャール月五日（一一八二年二月一日）に結婚した。

イッズ・アッディーンの彼の兄弟イマード・アッディーン・ザンキーとの領地替えの記述

その後イッズ・アッディーンは、アレッポの城砦に同年シャール月一六日（二月二二日）まで留まった。彼は、モスルに加えてシリアを保持することができないと悟った。というのは、スルターンを恐れるために、彼はシリアに留まり続ける必要があるからである。また、アミールたちは彼にさらなる要求を押し付けていた。彼らは、自分たちが彼を選んでいとみなしていた。また彼の視野は狭かった。彼の丞相ムジャールヒド・アッディーン・カイマーズ *Mujāhid al-Dīn Qaymāz* もまた視野が狭く、シリアのアミールたちの受難を退けることができなかった。イッズ・アッディーンは、シャール月一六日（二月二二日）にアレッポの城砦を出発してラッカに向かった。彼は、彼の息子のムザッファル・アッディーン・ブン・ザイン・アッディーンを彼の代わりにそこに残し、ラッカに到着するまで進んだ。

彼の兄弟イマード・アッディーンは、兄弟二人の間の取り決めによりイッズ・アッディーンを迎えた。アレッポとシンジャールの交換が成立した。そして、イッズ・アッディーンは、彼の兄弟イマード・アッディーンのためにその誓いをシャール月二一日（二月二七日）に行つた。イマード・アッディーンのためにアレッポを引き受ける者が進み、イッズ・アッディーンのためにシンジャールを引き受ける者が進んだ。

五七八年ムハッラム月一三日（一一八二年五月一九日）にイマード・アッディーンは、アレッポの城砦に登城した。

スルターンのエジプトからの帰還の記述

一方スルターンに關していえば、キリージュ・アルスラーンの手になる和約の成立後、エジプト―エジプトに神の守護あれ―に進んだ。彼は、甥のイッズ・アッディーン・ファッルーフシャー 'Izz al-Din Farrukhsah' をダマスクスの総督として残していた。マリク・アッサーリフの死去の知らせが彼のもとに届くと、彼はフランクのシリア攻撃を恐れて、シリアに戻る決心をした。さらに、五七七年ラジャブ月一日金曜日（一一八一年十一月一〇日）のファッルーフシャーの死去の知らせが彼のもとに届いた。それゆえ、彼の決心が強まった。

彼のダマスクス到着は、五七八年サファル月一七日（一一八二年六月二二日）であつた。彼は直ぐにバイルト遠征の準備を開始した。彼はエジプトからの帰還の際に停戦協定が無いにもかかわらず、横柄にもフランクの領土を通過していた。そして、バイルトに向かい、そこに布陣したが、目的を果たすことができなかった。フランクは軍隊を集結し、彼をそこから退散させ、彼はダマスクスに入った。

モスルの使者たちがフランクのもとに至り、彼らにムスリムとの戦いを促していることが彼の耳に入った。彼はモスルの人々が彼らの誓約を破つたと判断し、神の敵に対するイスラームの軍隊の統合をもたすために彼らへの攻撃を決心した。彼はそのための準備を始めた。そのことを知ったイマード・アッディーンは、モスルにそれを知らせ、軍隊の準備を急ぐように使者を遣わした。

スルターンはアレppoに向かつて進軍し、同年ジュマード・アルウラー月一八日（九月一九日）にそこに布陣をした。彼は三日間そこに留まり、ジュマード・アルウラー月二二日（九月二二日）にそこからユーフラテス川に向かつて軍を進めた。スルターンとハッラーンの領主ムザッファル・アッディーンとの間は固く結ばれていた。またムザッファル・アッディーンはモスル側にすでに嫌悪感を抱いており、ムジャード・アッディーンを恐れていて、スルターンに保護を求めていた。そこで、彼はユーフラテス川を越えて彼のもとに向かった。ムザッファル・アッ

ディーンは、スルターンにそのことが容易いことであることを伝えて彼らの土地に侵入することを促した。スルターンはユーフラテス川を越えてルハー（エデッサ）、ラッカ、ニシビーーン、サッルージュを手に入れた。それからハーブルに守備隊を置き、彼にイクターとして授与した。

スルターンのモスル攻撃の記述

今回のスルターンのモスルに対する攻撃は、五七八年ラジャブ月一日木曜日（一一八二年一月一二日）のことであった。そのとき私（イブン・シャッダード）は、モスルにいた。彼のモスル攻撃の数日前に、私は使者としてバグダードに派遣されていた。私は、彼らに援助を求めて、ティグリス川を急いで下り、二日間と三日目の二時間でバグダードに到着した。彼らからは、シャイフ・アッシュユーフ⁽²¹⁾に使者を派遣するということ以外は何も引き出せなかった。彼はそのときすでにバグダード側の使者としてスルターンのもとにいた。彼は、スルターンと会談し、事態に注意深く対処することを命ぜられていた。また、モスルからも援助を求める使者がパフラワーン⁽²²⁾のもとに送られていた。けれども、彼の側からは、スルターンとの戦いよりもさらに危険な、彼の支配下に入るならばという条件以外は得られなかった。

数日間、スルターンはモスルに面して留まった。彼は、この町は偉大であり、この方法での包囲では何も得られるものが無いことを知った。それから、モスルを獲得する方法は、その城砦とそれを取り巻く領土を獲得することであり、時間をかけてモスルを弱めることであるとみた。それゆえ彼は、そこから移動し、五七八年シャーバーン月一六日（一一八二年一月一五日）にシンジャールに面して布陣した。

サラディンのシンジャール獲得の記述

サラディンはシンジャールを包囲し続けた。そこにはシャラフ・アッディーン・ブン・クトブ・アッディーン Sharaf al-Din b. Qutb al-Din とある部隊が守備していた。サラディンはこの町をラマダーン月二日（一二月三〇日）まで圧迫し、武力でこの町を獲得した。シャラフ・アッディーンと彼の部隊は、名誉を与えられ警護されてモスルに去った。サラディンはこの町を彼の甥のタキー・アッディーンに与え、そこからニシビーンに出発していった。

ヒラートの領主シャー・アルマンの出来事の記述

それは以下のことであつた。モスルの支配者たちが、シャー・アルマンに彼の支援を求めて使者を派遣した。そして、彼らは彼ら自身を彼の腕のなかに投げ出した。するとシャー・アルマンは彼らを支援するためにヒラート *Khilat* から出てハルザム *Harzan* に野営した。彼は、モスルの主イZZ・アッディーンに使者を送り彼に知らせた。そこでイZZ・アッディーンはモスルを出て、五七八年シャッワール月一五日（一一八三年二月二一日）にシャー・アルマンに合流した。マールディーン（モスル）の領主も同様であつた。アレッポの軍隊の一部隊も到着した。このすべてはスルターンとの対決をもくろんでいた。

シャー・アルマンは、シャイフ・アッシュユーフの仲介で和約を協議するためにスルターンのもとにバクタムルを派遣した。しかし、彼らの間で決着には至らなかつた。するとスルターンは、シャー・アルマンの軍隊の方に向かつた。シャー・アルマンはスルターンの接近の知らせを聞くと、彼の領地に戻つていった。イZZ・アッディーンもまた彼の領地に戻つた。彼らの連合が解散したのである。その後すぐに、スルターンはアーミドに向かつて進軍し、そこに面して布陣した。それからそこを攻撃し、八日間でそこを奪取した。それは五七九年ムハッラム月の始め（一一

八三年四月の終わり）であつた。彼はその町をヌール・アッディーン・ブン・カラー・アルスラーン *Nūr al-Dīn b. Qarā Aṣṣlān* に与えた。

またスルターンは、彼がそこで手に入れたあらゆる金銭とそれ以外のものをイブン・ニーサーン *Ibn Nisān* に与えた。それから、彼はアレppo攻撃のためにシリアに向かつて進んだ。

この時期に、イマード・アッディーンは進軍して、五七八年ジュマダー・アルアーヒラ月九日（一一八二年一月一〇日）にアウザーズ *ʿAzzāz* の城砦を破壊した。また、同様にカファルラーサー *Kaḥḥalathā* の城砦も破壊された。彼はそれをバクミシュ *Bakmish* から得たものであつた。そのとき、バクミシュは同年ジュマダー・アルウラー月一二日（二月一三日）にすでにスルターンのもとに行つていたからである。彼は、その領主がディルディム・アルヤールキー *Dirdirim al-Yarḡī* であるテル・バーシル *Tell Bāshir* を攻撃した。彼もまたすでにスルターンのもとに行つていた。それゆえ、彼はそこから得るものが無かつた。ムスリム側の軍隊が統一を欠いていたために、フランクによるこの地域への一連の攻撃が行われたが、神がフランクを押し退けた。イマード・アッディーンは、カルザイン *al-Karṣayn* の降伏を受けてアレppoに戻つた。

スルターンのシリアへの帰還の記述

スルターンはシリアに戻ると、テル・ハーリドの攻撃に着手した。彼はそこを包囲し、攻撃し、五七九年ムハッラム月二二日（一一八三年五月一七日）に奪取した。それから、彼はアレppoに向かつて進み、ムハッラム月二六日（五月二二日）にそこを包囲した。彼は、最初にマイダーン・アルアフダルに布陣した。その後、彼は軍隊を戦闘に送り出し、バーンクラーサー *Banquṣā* とバーブ・アルジナーン *Bāb al-Jinnān* で朝に夕にアレppoの軍隊を完敗させた。アレppo包囲のある日に、彼の兄弟タージュ・アルムルク *Tāj al-Mulūk* が負傷した。彼に神のお恵みあれ。

彼のアレッポ攻略の記述
神がそのお恵みを神聖になされますように

サラディンがアレッポに現れたとき、彼はあらゆる方面から軍隊を招集した。すると膨大な数の人が集結した。そこで彼はアレッポに猛攻撃をかけた。イマード・アッディーンは、サラディンと対抗する力が無いことを悟った。彼はすでにアミールたちの彼に対する要求と彼らの御しがたさに憤慨していた。それゆえイマード・アッディーンはヒシャーム・アッディーン・トゥマーン *Hishām al-Dīn Tumanān* に、彼の代わりにスルターンのもとに行き、アレッポの降伏の代わりに彼の領地の回復を交渉するようにせき立てた。合意の基礎が確立したが、市民と軍隊の誰一人としてことが成し遂げられるまで感じ取ることがなかった。この合意は成立し、それが広められた。すると軍隊はイマード・アッディーンにそのことを尋ね、彼は彼らにそれを知らせた。そして彼は彼らに自らの行く末を決めることを許した。すると彼らは自分たちと民衆のためにイッズ・アッディーン・ジュールディーク・アルスーリー *ʿIzz al-Dīn Jundīk al-Nūrī* とザイン・アッディーン・ビリク・アルヤールキー *Zayn al-Dīn Bīlik al-Yārūqī* を使者としてスルターンのもとに送った。彼らはスルターンのもとで夜まで座して、スルターンの軍隊とアレッポの人々を護る誓いの言葉を求めた。それはサファル月一七日（六月一日）のことであった。

軍隊とアレッポの有力者たちはスルターンの服従するためにマイダーン・アルアフダルに出てきた。彼は彼らに名誉の服を与え、彼らの心を安んじた。イマード・アッディーンは、彼のことを解決するために城砦に留まり、彼の物資と財貨を運び出した。一方スルターンの方は、サファル月二三日（六月一六日）木曜日までマイダーン・アルアフダルに留まった。

その日彼の兄弟タージュ・アルムルークは彼が受けた傷がもとで命を落とした。彼の死はスルターンを深く悲しませた。彼は弔意を受けるために座した。

同日イマード・アッデインは、彼に服従し哀悼を述べるために城砦を下り、スルターンと共にマイダーン・アルアフダルに出かけた。彼ら二人の間には合意があった。スルターンは彼を彼の幕舎に迎え入れ、彼に豪華な贈り物と選りすぐりの馬を与えた。また彼は彼の従者たちに名譽の服を与えた。

イマード・アッデインは、シンジャールに向かう途中カラ・ヒサルに向かった。スルターンはイマード・アッデインの出発の後、町のことには無関心のまま彼の幕舎に留まっていた。サファル月二七日⁽²³⁾(六月二〇日)月曜日まで町のことには多大な関心を示さなかった。その日、スルターンはアレppoの城砦に喜び勝ち誇って登城した。フサーム・アッデイン・トゥマーン *Husām al-Dīn Tuman* は彼のために極上の宴会を整えた。彼はイマード・アッデインが衣服やそれ以外の物で残していた物を獲得するために後に残されていた。

彼のハーリム獲得の記述

サラデインはハーリム *Harim* の引き渡しを受ける者をすでにそこに送っていた。しかしその総督が彼らに抵抗していた。そしてその部隊がサラデインに誓いを求めるために派遣された。彼らの知らせがサファル月二八日(六月二一日)火曜日に届いた。そのとき彼は彼らのために宣誓をし、直ちにハーリムに向い、サファル月二九日(六月二二日)に当地に到着した。そして彼は当地の引き渡しを受けた。彼はそこに二日間滞在し、その協定を確立した。彼はイブラーヒーム・ブン・シルワ *Ibrāhīm b. Shīwa* をその総督に任命した。その後彼はアレppoに戻り、五七九年ラビー・アルアッワル月三日(一一八三年六月二六日)にアレppoに入った。彼は軍隊に許可を与え、彼らのすべては彼ら自身の土地に帰った。彼はアレppoの再建と再編のために留まった。

以下続く

注

- (1) アサド・アッディーンはヌール・アッディーンの子の総督の一人で、エジプトのファティマ朝の最後から二番目の宰相であった。サラディンは彼の甥にあたる。彼の家系はアルメニアのクルド系であった。ザンキーの死後ヌール・アッディーンに奉仕した。十字軍がエジプトに侵攻すると、ヌール・アッディーンはエジプト遠征を決意し、アサド・アッディーンをエジプト遠征軍の指揮官として派遣した。この時期のサラディンも遠征に同行した。アサド・アッディーンは三度エジプト遠征を行った。彼はファティマ朝の宰相に任じられたが、およそ二か月後に死去した。
- (2) カラクは死海の東に位置する砦。アルメニア語で「町」を意味する。十字軍によって砦が建設された。ダマスクスからの巡礼路、エジプト・シリア間の交易路として機能していた。(E², IV, p. 609.)
- (3) シャウバクは十字軍によって建設された砦。ヒッティーンの後サラディンはカラクとシャウバクを支配し、弟のマリク・アルアーディンに与えた。(E², IX, p. 373.)
- (4) サラディンはスンナ派のシャーフイー派のムスリムであった。エジプトをファティマ朝時代のシーア派からスンナ派に変換する政策が進められた。アイユーブ朝を創始したサラディンは、アッバース朝カリフの支配のもとでイスラーム法の回復をもくろんだ。また、エジプトに於けるスンナ派の影響力を強めるため、エジプトにマドラサを建

『サラディンの稀有で至高の書』—その4—(松田)

設した。(松田『サラディン』一一—一四頁)

- (5) ヒムスは、ダマスクスとアレップの間に位置する。サラディンは、一一七五年にヒムスとハマーを獲得した。(E², III, pp. 397-99.)
- (6) タッバーバ al-Dabbāba は木材と金属で作られた、四層の塔でできた可動式の兵器。下の層に兵士が入り、城砦に近づき、そこに穴を開ける。一番下の層は材木で、その上は鉛で、その上が鉄で、一番上が銅で覆われている。城壁を攻撃するために車輪が付けられている。城壁を破壊するための杭打機が付けられている。また上から投げつけられたものを払いのけ押しつけ進むのでそのように名付けられた。(Muhammad Ahmad Rahmān, *Mu'jam al-A'fāz al-Ta'rikhiyya fi al-'Asr al-Mamlūkiyya*, Bayrūt, 1990, p. 73.)
- (7) 旗持ち、アラムダールは、スルタンの行列で旗をもつ者のラカブ。(同上, p. 114)
- (8) アシユタラー Ashṭarā は、シリアのダマスクス行政区のハウランに位置する。(Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, Bayrūt, 1979, IV, p. 125)
- (9) サラディンの父ナジュム・アッディーンは、シャディー Shādī の息子であり、ティグリス川畔のティクリートの代官であった。彼は代官として父親の職を継承した。その後モスルの支配者ザンキーに奉仕替えをした。晩年はカイロに移り死去している。
- (10) アーディド (一一五一—一二二) は第一四代で最後の

- フアーティマ朝カリフ。カリフ・ハーフィズの孫。一一六〇年に九歳でカリフ位に就いた。カリフとしての存在感はなく、二一歳でこの世を去った。(松田、前掲書、六頁)
- (11) アルカーは、ダマスクス行政区の地域で海岸線に面している。トリポリの北二〇キロ弱で海岸から一〇キロ程に位置する。ペルシア人旅行家ナースィル・ホスローは一〇四七年にアルカーを訪れた。(Le Strange, *Palestine under the Moslems*, Beirut, 1965, pp. 397-98.)
- (12) アブド・アンナビー・ブン・マフディーは、イエメンのザビードに樹立された短命の王朝の最後の支配者。アブド・アンナビーはマフディー家の支配を受け継ぎ、勢力を拡大していた。トゥーラーンシャーに率いられたアイユーブ朝軍はイエメンに侵攻し、南部を一掃しザビードを攻略した。アブド・アンナビーとその兄弟は逮捕され一一七六年に処刑された。(E², V, pp. 1244-45.)
- (13) カンズ族は、ラビーウ部族の一族で、九世紀にアスワンの地域に移り住んだ。彼らは金鉱を支配下においた。一族の名祖は、一〇〇七年フアーティマ朝カリフ・アルハークムから、反乱者アブー・ラクワの捕獲を行ったことでカンズ・アッダウラ *Kanz al-Dawla* という称号を受けた。この称号は彼の子孫によって継承された。アイユーブ朝とマムルーク朝初期、一族はその支配を南部のヌビア王国に拡大した。一四世紀末と一五世紀初めに、彼らは繰り返しアスワンのマムルーク朝の総督たちに戦いを挑み、アスワンと
- その付近を荒廃させた。(E², IV, pp. 567-68.)
- (14) ハマーの角はハマーに突き出る高原にあり、そこにはお互いに向き合って立つ二つの頂がある。(Le Strange, *op.cit.*, p. 359.)
- (15) 彼は、宦官のアミールで、ヌール・アッディーンのもの総督であった。彼は、イブン・ダーヤ兄弟の逮捕後、マリク・アッサリーフに仕える中心人物として台頭した。
- (16) 「神のお恵みを受けた泉」という意味。アレッポの南に位置する気晴らしの場所。
- (17) 『コーラン』第八章 戦利品、四六〔四四〕節、井筒俊彦訳。
- (18) ムザッファル・アッディーンは、一一六八年にアルベラの領主として父の跡を継いだ。そのとき、彼は十四歳であった。彼はアターベクにより投獄された。彼はバグダードを訪れた後、サイフ・アッディーンに仕えた。その後、彼はサラディンに仕え、エッデッサが与えられた。またサラディンの妹と結婚した。彼はサラディンの多くの戦いに参加し、勇敢さを示したが、特にヒッティーンの戦いで勇敢さを発揮した。
- (19) キリージュ・アルスラーンはルーム・セルジューク朝の最も重要なスルターンの一人。コニアを首都としていた。シリアのヌール・アッディーンとは同盟関係を抱いており、キリージュ・アルスラーンはフランクのシリア・アナトリア境界の支配を拒むためにヌール・アッディーンを援

助していた。(Ef, V, p. 104.)

- (20) ナフル・アルアズラクは、バフナサーとアレップ方面からのルームの境界に位置するマンスール砦の間にある港に面した川。一方、ナフル・アルアスワドはマッスィーサ地域とタルスース境界に面した川。(Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, vol. 5, Beirut, 1979, p. 317.)

- (21) シャイフ・アッシユーフはウラマーの長であり、サドル・アッディーン *Sadr al-Dīn Muḥammad* (1148-1220) がこの地位にいた。ハマウイーヤ家の一員であった。この家は元々タイラン系でスーフイーと法学者を輩出していた。

シリアに移住した一派は、アイユブ朝のマリク・アルカーミルとその子孫のもとで影響力をもった。シャイフ・アッシユーフのサドル・アッディーンはホラーサーンで生まれ、父と共にダマスクスに移り、父の継承者となった。(Ef, I, pp. 765-66.)

- (22) パフラワーン *Shams al-Dīn Pahlawān* はアゼルバイジャン、アッラーン、ペルシアのイラク領の領主で、セルジューク朝スルターン・アルスラーンのアターベクであった。

- (23) *Nawādir*, p. 60 では一七日となっているが、二七日のことである。